

庭園の歴史に関する研究会

奈良文化財研究所では、庭園に関する調査研究をおこなっており、平成23年度からの第3期中期計画においては、中世庭園の研究に取り組んでいます。これは第1期中期計画（平成13～17年度）における奈良時代までの庭園の研究、第2期中期計画（平成18～22年度）における平安時代庭園の研究を引き継ぐもので、その流れの中で2011年度から、様々な分野の専門家を招いて「庭園の歴史に関する研究会」を開催しています。この研究会は、分野の異なる研究者がそれぞれの領域の専門的観点から庭園について考察することによって、新たな知見を得ようというものです。

2011年度は「鎌倉時代の庭園―京と東国―」、2012年度は「禅宗寺院と庭園」をテーマに、庭園史学・造園学の研究者のほか、考古学、国文学、美術史学、建築史学等の専門家が参加しました。

2012年度の研究会について簡単に紹介しますと、まず研究発表が5つあり、その後それらの発表を受けて総合討議がおこなわれました。研究発表は、西芳寺庭園の一部にある石組の作者、庭園と山水画の関係、禅僧夢窓疎石の事績を中心とした禅宗と庭園のかかわり、日本における禅宗伽藍と庭園の関係、日本と南宋の禅宗寺院建築および庭園等が主題として取り上げられました。続く総合討議では、日本と南宋の禅宗伽藍および庭園、禅僧夢窓疎石、山水画と庭園・假山といった3つの話題を中心に、各参加者が専門的な視点から意見を交わしました。

奈文研では、今年度以降も引き続き、足利將軍関連の庭園、戦国時代の庭園文化等をテーマに研究会を開催し、中世の庭園について更に掘り下げていく予定です。（文化遺産部 中島 義晴）



研究会の様子

『文化財論叢Ⅳ』の刊行

昨年10月、奈良文化財研究所創立60周年を迎えたことを記念し、『文化財論叢Ⅳ』が刊行されました。『文化財論叢』は、これまで30、40、50周年の節目に刊行されてきました。今回で4冊目にあたるこの論文集は、奈文研に在籍、あるいは関連する研究者総勢78名の日ごろの研究成果が収録されたもので、論文76編、1479頁と、これまでで最大のボリュームになっています。

奈文研の研究職員の専門分野は、考古学、文献史学、建築史学、造園学、保存修復科学、年輪年代学、環境考古学等多岐にわたっています。この論文集の内容も文化財に対する総合的なもので、扱っている時代は旧石器時代から近代まで、地域も日本列島のみならず、中国、韓国、東南アジア等本当に様々です。また、文化財の保護や活用に関する研究成果についても収録しています。

松村所長が序言のなかで、「個人研究と共同研究は車の両輪であり、両者の密接な提携なくしては良好な研究成果は期待できない。研究所の研究成果は、常に共同研究の中で切磋琢磨された個人研究が核となる」と述べています。『文化財論叢Ⅳ』はこれを具現化したものといえるでしょう。そして、われわれは今後も研究活動をつづけていきます。

なお、この『文化財論叢』は、この5月『文化財学の新地平』と改題して、吉川弘文館から発売されています。ご興味がある方は、ぜひ手に取っていただき、文化財研究の最前線に触れてみてはいかがでしょうか。（奈文研ニュース編集委員会）



これまでにないボリュームとなった文化財論叢Ⅳ